



6

募金活動の幅を広げた ユニセフ学習会

報告者 東京都品川区立大井第一小学校 国際協力委員会担当 杉浦 紀彦先生

1、学校の概要

本校は、学級数23、児童数794人（平成23年4月現在）の品川区で一番大規模な小学校です。
また、開校されて136年の伝統があり、地域とのつながりも深い学校でもあります。

2、委員会の活動内容と、学習会実施のいきさつ

本校国際協力委員会は約20人の児童が、年10回の活動を通して、自分たちが世界のためにできることは何かを考えながら、さまざまな取り組みを行ってきました。活動の一番の柱は毎年校内で行っていたユニセフ募金です。年2回の募金に向けて、ポスターや呼びかけを行い、集めて、寄付をしています。自分たちが集めたお金が、ユニセフを通して世界の子どものために役立っていることを漠然とは分かっているものの、世界のどこで、どのような子どもが何に困り、自分たちがどう支えていったら良いのか、また寄付したお金がどのようにして世界中の仲間のもとに届いているのかということを、具体的に知って活動している児童はほとんどいませんでした。そこで、本校にほど近い港区高輪の日本ユニセフ協会にお願いをして、スタッフの方による「ユニセフ学習会」を委員会の時間に行いました。

3、ユニセフ学習会

一昨年度、昨年度と行った学習会では、2度とも本校の卒業生である職員の方に来ていただきました。45分間という短い時間の中ですが、DVDや資料、体験活動などが盛り込まれ内容の濃いものでした。

内容（平成21年度）

- ・DVD「ユニセフの活動」
- ・水がめに水を入れて運ぶ体験
- ・蚊帳を張り、そこに入る体験
- ・講義 ・質問コーナー

内容（平成22年度）

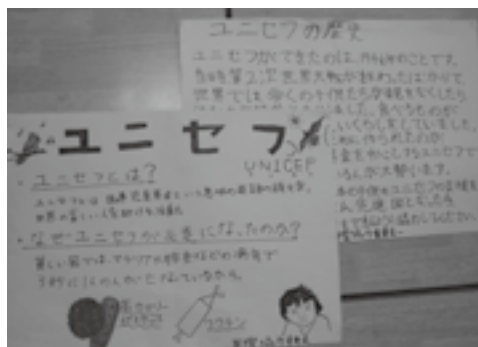
- ・DVD「ユニセフの活動」
- ・水がめに水を入れて運ぶ体験
- ・地雷のレプリカに触れる体験
- ・講義 ・質問コーナー

いっぱいに入れた水がめは、およそ15kgの重さがあります。フラフラしながら持つ児童も、「楽勝だよ。」といって持ち上げた児童も、子どもがこのかめを持って毎日5～10kmもの道のりを歩くこと、その仕事によって学校に行くことができない子どもがいること、募金が井戸を掘る資金になり子どもたちの役に立っていることなどを聞くと、皆とても驚き、かめの重さをまた違った意味で重く感じる事ができたようです。



4、募金に向けた取り組み

その後行った募金の啓発活動には、ただ「たくさんの寄付を集めたい」ではなく、「募金の意味を理解して寄付をしてもらいたい」という思いで取り組みました。校内に掲示されたポスターは、ユニセフの活動内容をまとめたものや、100円の募金でできることを調べたもの、募金したお金がどのようにして援助をしている人に渡るのかを図にしたものなど、児童なりに工夫をしながら作成しました。また全校への呼びかけも、



期日を伝えるだけでなく、ユニセフ募金のしくみや自分たちができる取り組みを1年生にも分かりやすい言葉で話すことができました。

5、募金の実施

募金活動は、校内で2日間、校外（JR大井町駅）で1日行いました。校内では事前の呼びかけのおかげでたくさんの募金が集まりました。中には、「おこづかいをすこしずつためました。こまっている人のためにつかってください。」という小さな手紙も添えて預けてくれた1年児童もいました。校外での活動では、駅を利用する方や地域の方にたくさん募金をしていただきました。卒業生だという方や近所にお住まいの方から励ましの声をいただいたり、元気な声に引き寄せられたと言って笑顔で募金していた方もいました。



6、活動を終えて

ユニセフ学習会によって「募金活動を行う」という行動は、学習会以前と以後では変わりませんが、行動に込められた思いは大きく変化させることができたと思います。それは、募金を呼びかける声であったり、厚意を寄せてくださった方への「ありがとうございます。」という声で感じられました。もちろん映像や活字から学ぶことはたくさんありますが、やはり生の声を聞く、体験するということは児童にとって強く心に響くものだと、今回の活動を通じて学びました。